

風を起こす <第14回>

閉塞感を打ち破った一歩

長崎県島原振興局建設部河港課港湾漁港班主任技師

井手 哲さん

長崎県にある島原半島は2010年、国内では初めてとなる「世界ジオパーク」に認定された。その中央にそびえるのが雲仙・普賢岳。噴火にともなう火砕流が甚大な被害をもたらしてから今年で20年目を迎える。かつて牙をむいた山のふもとでは現在、青々とした原っぱでヤギや羊が草を食む。その仕掛け人が長崎県島原振興局の井手哲さん。真剣に悩んだ自らの経験が地域の新たな可能性につながった。

新社会人が街に清々しい風を吹き込む4月。彼らのまっさらな姿に目を細めながら、自らの過去を振り返る。「こんなはずじゃなかった…」希望に燃えて入った職場で理想と現実のギャップに戸惑った経験は、大小の差こそあれ誰しも身に覚えがあるのではないか――。

自分が選んだ道は間違っていたのか

「皆が快適に暮らせるまちづくりに携わ

りたい」希望を胸に2000年4月、井手哲さんは長崎県庁に入庁した。初任地は島原振興局都市計画課。「技師として、道路や公園などの整備に関わっていける」井手さんは念願の職場で意欲に満ちていた。だが、ほどなくして現実の厳しさを思い知らされることになる。

「住民から『新しい道路は作るな!』『公園なんかいらない!』という苦情の声がかんなにもたくさん寄せられるのかと。行政の役割とは一体何なのか?」と深く考

[いできとし]

1974年、長崎県生まれ。2000年、九州大学工学部建設都市工学科を卒業後、長崎県庁に入庁。島原振興局、対馬支庁を経て現職。2004年より2年間、JICA青年海外協力隊としてニカラグアにあるエルビエホ市役所に赴任した経験を持つ。高校時代はラグビー、大学時代はアメフトに打ち込んだスポーツマン。昨年は妻の声援を受け、仲間たちとトライアスロンにも挑戦した。



ニカラグア・エルビエホ市役所での仕事風景。赴任当初は職員の皆さんに一つ一つ仕事を教えてもらいながら覚えていった



えるようになりました」

無駄な公共工事への批判が高まっていた折、その矛先は公共工事すべてに向けられているかのようだった。

大学時代の友人と飲み会で近況報告をし合うと、やけに輝いて見えた。商社に就職し、世界を股にかけ案件をこなす話を聞きながら、心底うらやましいと思った。「自分が選んだ道は間違っていたんじゃないか？」その疑問は、時間を重ねるごとに井手さんの心の中で大きくなっていった。入庁4年目で対馬支庁に異動し環境が変わっても、迷いは消えなかった。

暗闇の中の一筋の光

「県庁、辞めようか……」真剣にそう考えた矢先、同じ年齢の技師が青年海外協力隊の現職派遣制度を活用し、タンザニアに派遣されることを知った。意表を突かれる選択だった。

「青年海外協力隊と聞いても、アフリカで井戸掘りしているイメージくらいしかありませんでした。自分には無縁な世界だと思っていましたから」

興味を引かれた井手さんは、青年海外協力隊について情報を集めた。独立行政法人国際協力機構（JICA）では農林水産や教育文化以外にも、土木、都市計画、建築の職種で人材を求めていることを知った。暗闇の中に「一筋の光が差し込んだ」。

「途上国の都市計画に参加して、まちづくりの創成期に一度携わってみたい。公共事業の根っこに携わることによって、何か見えてくるものがあるんじゃないかと思っただけです」

不純かもしれないが、正直、貧しい人を助けたいというより何かを探したいという気持ちのほうが強かった。

上司に相談すると「2年間、行ってこい」と後押ししてくれた。部下の可能性、やる気を尊重してくれる上司のお陰で、話はトントン拍子に進んだ。

都市計画部門で募集していた国は中米

にあるドミニカとニカラグア。「派遣されるなら、明るい印象のドミニカのほうがいい」井手さんは密かに期待したが、面接試験の後、受け取った合格通知にはニカラグアと記載されていた。

ニカラグアは東はカリブ海、西は太平洋に面し、北海道と九州を合わせたほどの広さに約570万人が住む。独裁政治に対する革命後、長く内戦が続いた影響で国民所得や識字率などが未だ低い水準にある。この地域ではハイチに次ぐ貧困国。強盗や殺人事件も多発し治安が悪い。

そんな地域へ派遣されることに、家族は当然反対した。「なんで、わざわざそこへ行くの？」とりわけ猛反対したのは祖母。井手さんは20歳のとき皮膚ガンを発症し、9カ月間入院していた。祖母が孫の身を安するのも無理はない。

井手さん自身もちろん不安はあった。「胃腸が弱いから水や食事が合わなければ体がもたないのではないか」その不安以上にチャレンジしたい気持ちのほうが強かった。「これから先、悶々としたまま日々をやり過ごすより、今ここで新しいことに挑戦してみたいんだ」自らの思いをぶつけて家族を説得した。

本音はなんなのかな？

万事整えた井手さんは3月末の人事異動のタイミングでJICAに派遣され、

ニカラグアの学校で子どもたちを対象に平和教育も行った



4月から長野県駒ヶ根市で派遣前訓練に入った。訓練ではニカラグアの公用語であるスペイン語のほか、途上国で生活していくための基礎知識を学んだ。並行してポリオ、破傷風など予防接種を1週間に1種類ずつ受けた。

3カ月の訓練を終了した2006年7月、井手さんは派遣国に向けて飛び立った。「ニカラグアの第一印象を一言で言うところ、暗い」ですね。町もボロボロだし、道行く人もボロボロの服。すべてがおんぼろで、覚悟以上に大変なところに来てしまったなと思いました」

まずは地方都市サンマルコスで現地訓練を受けるのだが、到着2日目、井手さ

んは異国の地で手厚い洗礼を受けた。絶望的な下痢をして寝込んでしまったのだ。これから過ごす2年間を思うと、気が遠くなりそうだった。

同じ時期にニカラグアに派遣された隊員15名は1カ月の訓練で体を慣らした後、各地に散っていく。井手さんは首都から約250 kmの距離にある、チナンデガ県エルビエホ市に赴任した。

住民目線から見えてきたもの

ホームステイ先は勤務先からほど近い一般家庭。自分の母親と同年代くらいのミッドリアさんがホストファミリーだ。JICAの青年海外協力隊では現地の住民と同じ生活を送ることを基本としている。即ち、同じ家に住み、同じ物を食べ、同じ仕事をする。

井手さんは勤務先のエルビエホ市役所で、日本で言うところの建設部都市計画課に配属された。都市計画のマスタープラン策定をサポートするのが任務。

この国では内戦に加えハリケーンなど天災の影響で、どの町も疲弊していた。経済も逼迫しているがゆえに復興は遅々として進んでいない。各国からの援助はあるが、行き当たりばったりで援助が散発的に点在、町の継続的な発展が見込めない状況にあった。

「社会インフラの面から見て、とにかく

く何もないことに驚きました。その一方、町中にゴミがあふれている。そもそも、ゴミをゴミ箱に捨てるという習慣がないんですよ」

都市計画にあたっては各地区の人口増加率、昼夜の人の流れなども考慮し、道路や下水道をどの方向に広げていくか、病院、学校といった公共施設をどう配置するか考えていく。そのベースとなるのが基礎調査。だが、基礎調査自体バラバラで結果としてまとまっていない。井手さんは手始めとして、基礎調査を整理し一つにまとめるところから着手、足りない部分には追加調査を行った。

「どうすれば人々が快適に暮らせるか」にこだわった井手さんが最も力を注いだのは、住民からインフラ整備に関する要望を聞き出すこと。各地区のリーダーの家に足を運び、どんな不便があるのか、雨が降るとどこが水浸しになるのか、不良グループはどこにたむろするのかなど、ヒアリング調査を重ね彼らの声に耳を傾けた。

地理的に近いこともあり、ニカラグア国民のアメリカ合衆国に対する憧れは強い。テレビから流れてくる便利で豊かな暮らしと比べ、自分たちには何もないとため息をもらす。だからと言って、差し当たってはアメリカ合衆国ほど物質的な豊かさが必要なわけではない。

「住民の生の声を拾い集めるうちに、とりあえず必要なものが見えてきました。逆

まちづくりワークショップでは生き生きとした子どもたちの表情が印象的



に言えば、本当に不便なこと、本当に困っていることが見えてきたのです」

住民の要望に加え、井手さん自身が住民目線で気づいたことも参考に、市のスタッフと試行錯誤しながら都市計画のマスタープランづくりを進めた。

子どもたちに託した町の未来

都市計画のプロとして着々と任務をこなしたように見える井手さんだが、言葉の壁もあつて、現地に着いて1年くらいずっと不完全燃焼のままだったという。日本に帰りたいと思ったのも一度や二度ではない。

「ホームシックのピークは赴任して4カ月経った頃。お腹をこわして体調が最悪だった上、言うような思いで行った仕事の約束を見事にすっぽかされたんです」

ニカラグアでは共に仕事をするスタッフもプロジェクトごとに雇われているケースが多い。「市役所が給料を払ってくれなかったから」と言つて約束を破られることも珍しくない。

「ちょうどその頃、大学時代の友人から子どもが生まれました」というメールが届いて、自分はこんなところで何やってるんだ、と」

すぐにでも帰国したい衝動を抑え、目の前の状況を冷静に見つめ直してみると「その土地にあった方法を、現地の人と一緒に考える柔軟さや適応力が大切なんだ」との思いに至った。

電気は一日のうち半分しか使えず、水もよく止まる。そんな環境だから「約束」の概念が日本とは違う。計画がうやむやになることも日常茶飯事。その中で、一つのことを最後まで作り上げることを目標に、マスタープランづくりをサポートした。井手さんは現地のやり方を尊重し、スケジュール通りに進まないことを前提にプラン策定をリードしていった。

「いつそのこと勝手に決めていけば仕事は早いのですが、それでは独りよがりになってしまいます。大切なのは、現地の人が自分たちの力でまちづくりできるように

することですから」

ニカラグアでの任期終了まで1カ月を切ったある日、井手さんは地元の中学生を対象にまちづくりワークショップを開催した。テーマは「20年後の私たちの町」。はじめのうちは戸惑いを見せていた子どもたちも、自由に想像していいんだと促すと次第に目を輝かせていった。

「こんな町になったらいいな」思い思いの夢を語り、その実現に向けた約束を交わす言葉が教室中にあふれた。そんな子どもたちに町の未来を託し、井手さんは帰国の途に着いた。

火山のふもとでヤギ・羊が草を食む!?

2006年7月、職場復帰した井手さんは再び島原振興局に配属された。久しぶりに歩いた島原の町は、何だかやけにさびれて見えた。

「島原市は人口規模的にはエルビエホ市とほぼ同じ約4万人ですが、アーケード街はシャッター通りですし、誰も管理していない空き家や空き地が目立っていました。雑草で覆い尽くされた廃屋が、町を廃れた印象にしていたんですね」

地域住民の憩いの場であるはずの公園も状況は同じで、維持・管理費不足のため荒れ放題となっていた。特に有明海に面した島原海浜公園は、大量のアオサが堆積して腐敗し、その異臭に対する苦情



比較的冷涼な雲仙のふもとでは、かつて羊の牧畜も行われていたという

が頻繁に寄せられていた。

「財政が厳しい中、どうやって改善していったらいいのか」頭を悩ませていたある日、一つの新聞記事が目にとまった。

——島原農業高校、廃棄物の堆肥化で特許申請。

「これだー」と閃いた井手さんの足は、自ずと島原農業高校に向かっていた。アオサの堆肥化の可能性を探るべく特許申請に携わった先生に相談すると、塩分などの問題から堆肥化の実現には時間がかかるという回答だった。だが、思わぬところで大きなヒントを得た。動物担当の先生から「ヤギ・羊の飼料にどうでしょ

う？」という提案を受けたのだ。

「ヤギ・羊の飼料として利用の可能性を示す文献もありましたし、試してみる価値は十分にあると思います」

さらに「公園の雑草を食べさせてみたら？」という意見も出された。早速、島原農業高校で飼っている羊を連れて公園に行くと、羊は猛烈な勢いで雑草を食み始めたのだ。

期待以上の食いつぶりに手ごたえを感じた井手さんは、農業高校の先生や生徒たちと協働で、ヤギ・羊による雑草除去に取り組むことにした。プロジェクトは生徒たちにより「ヤギ・羊ECO大作戦」と命名された。

具体的な実施方法も高校生たちに委ねられた「ヤギ・羊ECO大作戦」。その効果は、雑草除去にかかる年間50万円のコスト削減以外にも現れ始めた。ヤギや羊に触れ合いたい、住民たちが公園に集まるようになったのだ。

その姿を見た住民から「うちの空き家にも貸してもらえないだろうか」という要望も出始めた。雑草が生い茂る庭にヤギや羊を放つと、これまでは誰も足を止めることがなかった廃屋の前が、子どもたち

の賑やかな声が響き、高齢者たちが微笑む憩いの場に変わった。世代を超えた交流の広がりにもなつて、町は少しずつ活気を取り戻していった。

「ヤギ・羊ECO大作戦」は長崎県土木部パイロット事業として採択された後、(社)建設コンサルタンツ協会九州支部が主催する「まちづくりに関する提案の募集」コンテストで最優秀賞を受賞。人の輪が広がるように周囲を巻き込みながら、新たな可能性を目指し動き出している。

井手さんが島原振興局に再赴任して既に5年が経つ。いつ異動の辞令が出てもおかしくない。担当者の思い入れが強い事業は、人が変わった途端にしぼみがちである。しかし、住民の心が宿った「ヤギ・羊ECO大作戦」プロジェクトは井手さんの手を離れても、さらなる発展を遂げていくことだろう。

大切なのは「とにかくスタートを切る」と「たくさんさんの実績を皆と積み重ねていくこと」を身をもって知った井手さんに、もう迷いはない。

「これから、まちの未来のために自分ができることを探していきたい。それを考えることはワクワクするし、その仕事ができることに幸せを感じています」

穏やかな笑顔の中に、揺るぎない自信が垣間見えた。

(協会職員／篠田良子)